

卷頭言

「子どもの発見」に込めた思い

堀尾輝久

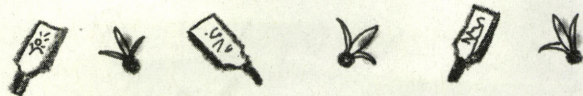
皆さんは「子どもの発見」という言葉を聞いて、どんな思いがするでしょうか。

初めての子どもを胸に抱く母親は、たつぷりとお乳を吸って眠りにつこうとする子ども顔を、ただ、うっとり眺め「幸せ」を感じている。

いや、離乳食を始めたばかりの子どもは、おなかがすいているのに、目の前のおさじを手で払って泣き叫び、母親の顔つきもだんだんけわしくなっていく。

保育園では、母親から引き離されて泣いている子が、一歳年長の子がそばに寄って何か声かけをしてくれると、びたりと泣きやんで、ニコニコし始める……。

「子育てって大変だなあ、でも子どもっておもしろいなあ、見ててあきないよね」「これって「子どもの発見」っていうことなのかなあ」でも、なぜ「子どもの発見」などと大げさな言葉がでってくるのだろうか。子どもからすれば、おむつが不快になれば、替

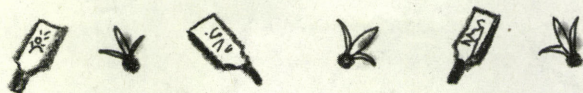


えてほしいと泣くし、「ねえねえ」と言えば、「どうしたの」とふり返ってくれる親（大人）がいてくれれば満足、安心なのだけど……」。

皆さんはJ.ルソーの『エミール』をご存じだと思います。この本は教育を考える人にとつての古典ですが、その序文には、この本は「ものを考えることのできるよき母を喜ばせるため」に書き始めたとあり、さらにこんな言葉があります。「人は子どもというものを知らない。子どもについてまちがった観念をもっている。……彼らは子どものおちにおとなをもとめ、おとなになるまでに子どもがどういふものであるかを考えない」子どもとは何かを問い、子ども時代（期）を具体的に記述したこの本が「子どもの発見」の書といわれる理由もおわかりでしょう。J.ペスタロッチやF.フレーベルもその影響を強く受けた思想家であり実践者でした。

そのころ、多くの詩人たちも子どもをたたえる詩を残しました。よく知られているW.ワーズワースの「子どもはおとなの親である」という一節にも「小さなおとな」観を逆転させる深い思いが秘められています。

それから少し後の時代になりますが、これも皆さんがよく知っているV.ユーゴーという作家・思想家は「コロンブスはアメリカ大陸を発見したが、私は子どもを発見した」という言葉を残しています。ご存知の『レ・ミゼラブル』も、そのつもりで読み直してみれば、当時の社会、労働者や女性と共に、子どもたちがどのような生活をしているか、街をさまよう家のない子どもらの寂しさとたくましさを、彼は書き留めているの



です。「子どもの権利」という言葉をフランス語で最初に使ったのはユーゴーだという研究もできています。そういえば、C.デイケンズの『オリバー・トゥイスト』も発展途上の資本主義社会の中の子どもの発見の書ともいえるのではないのでしょうか。

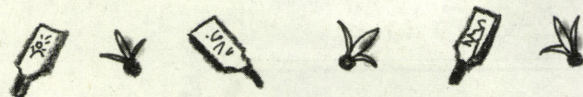
二〇世紀は「戦争の世紀」ともいわれますが、それだけに人々が、改めて平和と子どもに目を向けた時代でした。一九〇〇（明治33）年に出版されたエレン・ケイの『子ども世紀』は、その意味で象徴的です。新教育の思想と運動も、新たな、子どもの再発見と子どもの権利の思想の運動でもありました。J.デューイ、M.モンテッソリー、L.ヴィゴツキー、J.ピアジェ、H.ワロンなどの仕事を想起すれば、そのイメージがわいてくるでしょう。

それでは現代は子どもの世紀になったのか。とてもそうはいえません。世界に目を向ければ、多くの子どもたちが、戦争や暴力、そして飢餓の中で苦しんでいます。

とりわけここ数十年間、グローバルゼーションの名のもとに進められてきた新自由主義政策は、国と国の格差を抜け、豊かな社会も格差社会となってきました。

それでは、豊かさを満喫しているかに見える人々の家庭と子どもたちの生活は、果たして本当に、豊かといえるのでしょうか。

生まれた時から競争社会に投げ込まれ、習いごとを押しつけられ、勉強勉強と追いつてられ、テレビ文化は大人と子どもの境い目をとり払い、子どもは自然の中で、自由な遊びの中で、好奇心の塊のように活動し、学びとり、その世界を抜け、時に空想の世界



に遊び、空飛ぶ自分を夢みるようなゆとりを失っているのではないでしょうか。「空にすわれし十五の心」(啄木)はどこにいつてしまったのでしょうか。「子ども期の喪失」という表現が、アメリカでも日本でも、現代社会の貧困と子どもの権利の侵害を特徴づける言葉になっているのです。

戦争や貧困が子どもたちの未来を奪うことは明らかです。一見、豊かに見えても、現在を未来への準備としか考えない、前のめりの競争主義は、子ども期の充実を犠牲にすることによって、未来をも貧しくしているのです。

二〇〇八(平成20)年の十月、「九条の会」に呼応して「教育・子育て九条の会」が発足しました。「戦争は人の心のうちに生まれる」(ユネスコ憲章)とすれば、平和こそ人の心のうちに深く根をはらねばなりません。無知と偏見をなくし、互いに認め合い、敬意を払い、対話を交わすことが重要です。子どもを尊敬すべき存在だと感じ、愛情と敬意のまなざしをむけ、その要求に耳を傾け、受容し、応答する関係をつくるのが何より重要です。子どもは安全で安心できる、平和的で文化的な環境の中で子ども時代を過ごし、ゆったりと成長することが保障されねばなりません。

子どもは人間である。子どもは子どもである。子どもは成長発達し、現在の大人をのり超える存在である。子どもは欲求・要求表現(権利)の主体である。一見陳腐に見えるこの子ども観を豊かに肉づけする思想と実践と運動が求められているのです。

(東京大学名誉教授)